

彙報

京都帝國大學文學部哲學科
大正十年度卒業論文題目

○哲學專攻

プラトール後期における論理に就て
「プロクヌス」の哲學に就て

リツケルトの認識論に於ける實在と價值
カント認識論に於ける對象性の問題
善の理想

○印度哲學史專攻

阿毘達磨俱舍論にあらはれたる
七十五法論と因果論とに就きて

○心理學專攻

Psychologie der Liebe.

○倫理學專攻

人格の本質より觀たる實踐道德論(一名父子道論)

○教育學教授法專攻

教育と政治

宗教々育の意義を論じ眞宗の教義に及ぶ

○美學美術史專攻

プロウテノスが審美觀

○宗教學專攻

△選科生
委托生

加川航三郎
橋寺 太郎

觀山 雪洲
伊東 法俊

○菊池慧一郎

二之宮善亮

増田 正

山添恒治郎

高山 直通

鷲谷 龍澤

○山内 朝資

一 二六

藤井 祐正

○社會學專攻

利益分配法之研究
藝術の社會學的考察

魯西亞虛無主義の社會學的研究

山崎英次郎
佐原 六郎
金杉 恒彌

哲學倫理學研究會

二月十六日午後六時より學生集會所に於て卒業生・環徒會を兼ねたる例會を開き、左の講演あり。

救済及解脱の原理

文學士 久松 眞一君

新著紹介

國民道德論

藤井健治郎氏著

著者から一本を賜はつた事を感謝し、今通讀するに當つて思ひ浮んだ儘を忌憚なく書かせて頂きます。

特に注意を惹くべきことは「卷首」に著書も認めて居らるゝ如く是迄國民道德を取扱はれた多くの人々の意見とは餘程異なつて居ることである。何がその趣きを異ならしめたか云ふに夫れは國民道德に對する著者の態度が他の人々のご同じくないことである。在來の論者が概ね素朴的に我が國民道德の讚美者・謳歌者であり國士的口吻を藉りてのわが特有道德の説教者であつたに對し本著者は飽くまで研究的、批判的態度を持ち國民道德の建設者たらんを期せらるゝことである。

「國民道德の意義及其の倫理學との關係」に就いての基本的問題

が最初に明快に述べられてゐるのは以上の態度から出たものである。之が先づ論ぜられるのは如何にも自然である様と思はれるが從來餘り明かに論ぜられてゐない様である。「動機論」「規範論」及「國民道德及個人思想」を章を追ふて進むもの如何にも學研的方法である。能くある様に徳目の起原及發展の叙述に追はれることはなく是等は「動機論」以下の章下に納められてゐる。

検討の態度であること云ふならば然らば全然冷かな乾燥な第三者の觀察なりやと云ふに我が國民道德の長所美點を認むること甚だ鋭く動機論の如き徳の十分な體得によつて始めて著し得られると思はれる。隨所に現はるゝ散文詩とも見るべき説述法は又讀む者を魅する力がある。東京小石川櫻木町六北文館、菊版三四九頁、定價金參圓、(尾生光三郎)

バークレー人知の原理及對話

文學士 善浪達童譯

本書はバークレーの主著二篇『人知の原理に關する論文』(A treatise concerning the Principles of human knowledge)及「イラスミフイロノウサミの三つの對話」(Three dialogues between Iylas and Philonous)の譯である。カント「認識論の目的の一つが、ヒュームの懷疑論によつて其立場を喪ひ去らうとした數學及純粹自然科學をば救護して、其確實性を闡明すると同時に、其基礎をも明かにするにあつたことは周知の事實である。かくてユベルニカスの轉回の洗禮に淨化せられて以來、形而上學としての素朴實在論は認識論上の模寫說と共に其廢殘の姿を哲學の領域より

没し去るの止むなきに到つたことも亦周知の事實である。

今斯くのごとき時代割成の事業を導出せしめた主なる原因が、經驗論の破産にあつたと認めるならば、經驗論をして必然的に其 catastrophe を招來せしめたバークレーの觀念論が、假令其世界觀としての Spiritualism に矛盾があることは謂へ、譯者自ら妙しくも其自序に於て述べられて居る如く、何人も其のカントとの間に「共通な問題」を横へてゐることを許さなければならぬ。此の意味に於て既にカントの「序説」及「第二批判」やフイヒテの「知識學序説」及基礎」等のクラシックが譯せられた今日、當然なざるべくして未だせられなかつたバークレーの紹介が善浪學士に依つて寔に鮮明に且つ周到に成し遂げられたことを自分は非常に多きするものである。

學士は「譯者序説」に於て明晰にバークレーの根本思想を概説批評し其史的旨趣を明にせられてゐる。而して殆どすれば彼の觀念論即ち内在論が獨我論として一概に主觀的な形容詞のものに蔽はれることに疑惑を有し、其餘りに早計なることを一々バークレー自らの言葉に基いて證明せんと努められてゐる。事實、サブテンデルバントの說くごとく獨我論とは即ち der theoretische Egoismus の謂であるを解する時バークレーが Substanzとしての多數の精神を認容し、更にかゝる多數精神を支配する der allbeherrschende Geist を想定してゐることは明に其の嚴密なる意味に於ける獨我論を斷じ難きことを立證するものである。併しまた同時に、無限なる精神——神を想定せしめるに到つた根本基調を考察し、そこに重點を置くならば、彼の思想の獨我論たる一面を肯定するや